

「共産党員と平和」第二部をめぐって⁽¹⁾

海 老 坂 武

① きっかけ

一九五二年五月二十八日、アメリカ極東軍最高司令官であったリッジウェイが、北大西洋軍最高司令官としてパリに着任した。朝鮮戦争の直接の責任者であったリッジウェイのこの任命に反対し、共産党と労働総同盟(CGT)は、平和擁護のスローガンをかけてストライキを指令し、反対デモを組織する。デモは当局によって許可されぬまま強行され、その結果デュークロ以下共産党の主な幹部が逮捕された。共産党はただちに六月四日の抗議ストライキを指令したが、この指令は徹底せず、実質上ストライキは行われないに等しかった。

この一連の事件は、一九四九年の夏革命民主連合(R

DR)の運動を離れたあと文学作品(『自由への道』第三部、『聖ジュネ』、『悪魔と神』)の執筆に力を注いでいたサルトルを、再び政治的発言の場へ引き戻し、しかも一挙に共産党に近づけることになる⁽²⁾。この事件をサルトルは滞在先のイタリアで知ったのだが、そのときに受けた衝撃を、後に次のような言葉で語っている。

「ブルジョア階級が私に詰めこんだ諸原理の名において、そのヒューマニズムと(人文学)の名において、自由、平等、博愛の名において、私はブルジョア階級に死ぬまでつきることのない憎悪を捧げた。大急ぎでパリに戻ったとき、私は、書くか、さもないければ窒息してしまふ⁽³⁾かだった」

この〈憎悪〉のなかで書きつがれていったのが「共産

党員と平和」である。

② テキストの位置づけ

「共産党員と平和」は今日では『シチュアションVI』の中にまとめておさまられているが、そもそものは三部からなり、それぞれやや間隔をおいて発表されている。このうち第一論文（一九五二年七月に発表）と第二論文（一九五二年十一月に発表）は、二つのストライキの失敗のうちに労働者階級による共産党の否認を見て「愚かな満足感を示す」右翼と非共産党左翼を相手どった論争的性格の強い文章で、サルトルの新しい党派的な選択を明瞭に示している。すなわち、第一論文においては、まず第一に、ソ連の外交政策を戦前にまでさかのぼって検討し、ソ連はその「反ソ包囲作戦にたいする強迫観念」にもかかわらず、常に平和を欲してきたことを証明しようとする。次に、五月二十八日のデモがその失敗にもかかわらず、また共産党が失敗を覚悟していたにもかかわらず、「大衆の基本的な平和主義を代弁し」、「大衆の深い願望を表わす悲劇的な表現」であったこと、要するに共産党とプロレタリアートとのあいだにこの反戦デモにつ

いての原則的な不一致は認められないこと、を証明しようとする。そして第二論文ではこのストライキの失敗の原因を追求するのだが、サルトルはその因をプロレタリアート対指導者（党）の対立関係のうちにではなく、プロレタリアート自体の内的解体のうちに求めて共産党を弁護し、のみならず、「今日フランスにおいて大衆の凝集力を維持し、大衆の行動の有効性を保証するものは共産党以外にはない」とまで言い切るのである。

ソ連と共産党についてのこうした評価は、それが具体的な出来事をめぐってなされた判断であるとはいえ、それまでのサルトルの留保、批判の姿勢に大きな転換をもたらすものであった。事実、これ以後のサルトルは、平和運動への参加をとおしてソ連と共産党に近づき、彼の政治的アングジュマンは同伴者知識人としての活動そのものになっていく。ハンガリア動乱の受けとめ方、アルジェリア戦争へのかかわりは、たしかにこの同伴者としての位置どりに若手の修正を加えたが、基本的には、世界革命の現実態としてソ連を肯定的に評価し、共産党をフランスにおける革命運動の最大の担い手とみる姿勢は、すくなくとも六十年代前半までは維持されることに

なる。

しかしながら、「共産党員と平和」を書くことは、サルトルにとって、党派性を表明し、新しいアンガジュマンの型を確立するということにはとどまりえなかった。「共産党はどの程度に労働者階級の必然的な表現であるか」を「事実によって語らしめる」という問題設定それ自体が、〈事実〉の領域——説明、解釈、証明——に議論を押しこめない性格のもので、論をすすめるにしたがつてサルトルは、原理的な諸問題、とりわけ組織論へと踏みこんでいくことになる。しかも、原理的な諸問題へのこの踏みこみは、単にこの事件をめぐっての自分の主張や解釈を根拠づけるためのものではなく、同時に、政治的な顧慮から一挙に飛びこえた一つの溝を埋めるための思想的な自己検討を意味していた。すなわち、新たな政治的な選択下に、実存主義とマルクス主義との、「唯物論と革命」につぐ再度の〈突き合わせ〉作業が具体的に要請されたのである。しかもこの間に、カミュとの論争（五二年八月）があり、メルロオ・ポンティとの私的な討論があり、クロード・ルフオールとの論争（五三年四月）があり、ジャン・カナパとの応酬（五四年三月）

があった。⁽⁴⁾これらの論争はどれも、結果から考えるなら実り豊かな対話であったとはとても言えず、むしろ、仲違い、不和、絶交をまねいただけであった。ただこの時期におけるサルトルの思想的自己検討に刺激を与え続け、彼の思考に動きをもたらしめたことは確実である。五四年四月に発表された「共産党員と平和」の第三論文は、そうした流れの中で理解さるべきであろう。実際、フランスの労働者階級の沈滞の理由を一八四八年の二月革命以来のフランスの階級闘争の歴史の中で解き明かそうとしたこの第三論文は、一つの社会事象を社会全体の歴史的な枠組の中で把握しようとした点において、従来のサルトルにはみられない試みであった。思想の誕生に明確な日付けを打つことは滑稽であるが、マルクス主義者サルトルを語りうるとすれば、その自己形成は、ルフオールとの論争を間にはさんだこの三部作を書いていくなかで果たされた、と考えることができる。

「共産党員と平和」を構成する三つの論文を以上のよう⁽⁵⁾に位置づけた上で、以下の頁においては、考察を組織論の一点にしぼり、これを『弁証法的理性批判』にまで伸びてゆく思考の運動の一環として捉えるべく努めてみ

よう。というのも、まず第一に、「共産党員と平和」にはその他にも幾つかの原理的な問題が呈出されているが——たとえば経済と政治の不可分性、暴力と非合法など——その中心はやはり党と階級と大衆をめぐる組織論であり、かつその他の議論もすべて組織論に収斂されているからである。また第二に、組織論の検討をとおしてこそサルトルの政治思想の進展がもっとも鮮明にたどりうるし、しかも『弁証法的理性批判』へ通ずる道は、この問題で突きあたった障害を切りひらくその途上で探りあられたように思われるからである。

③ 階級と大衆、そして党

サルトルが組織論へと踏みこんでいったのは、党と階級との関係についての理論的考察を主題とした第二論文以後である。当初から「組織論」と名のつくようなものを意図していたとは思われないが、以後ルフォールとの論争から第三論文へと進むにつれて課題は次第に明確化されていった。この問題に取組むことになった事情は次のとおりである。

トロツキスト系の左翼は、二回のストライキデモの

動員が失敗したことの中に、プロレタリアートによる共産党の否認を見ようとした。これにたいしてサルトルは、労働者の意識を内側から分析しながら、ストライキを拒否したのはプロレタリアートではなく、個々の人間であり、彼らは階級の利害の事前において、グループや指導者との連絡を断った地点で、自分らの拒否を「特殊なケース」として不参加を決定したのだ、と反論する。プロレタリアートと党との対立ではなく、諸個人の士気喪失、無力感、孤立感、宿命感、無効な政治への嫌悪、歴史にたいする客体の意識、一言で言うなら、一九五二年におけるフランスプロレタリアートの内的解体をそこに見るのである。⁽⁵⁾

とするならば、そのような解体を惹き起こした原因こそ問われねばならないだろう。またこの解体についての党の責任の有無が問われねばならないだろう。ところが第二論文の中では、この原因究明にまっすぐむかう前に——この仕事は第三論文にまわされる——サルトルは自分の主張をもう一歩先に進める。すなわち、「階級はその統一を党の外に、党に反対して作り直すことができるか？」⁽⁶⁾という問いを立て、事実の観点からだけではなく、

原理の観点からも階級は党を否認しえないことを示そうとするのである。これは、論争の作戦としてはむしろマインナスであろう。ストライキの失敗から何としてでも共産党を免責せようとする意図が露骨に透けてみえるからだ。「プロレタリアートの内的解体」を歴史的に説明するにとどめた方が説得力を持ったであろうし、かつ無難であつたろう。だがこの問いを立てたことによってサルトルは、否応なしに組織についての原理的考察の方へのめり込み、いわば持札をすべてさらさざるを得なくなったのである。

第二論文で繰り広げられたサルトルの階級論をごく簡単にまとめて言えば、階級の統一は受動的に作り出されるのでも、自然発生的に作り出されるのでもなく、自覚（自己への働きかけとしての個人的実践）と組織化（他人への働きかけとしての集団的実践）をとおして実現される生成の運動である、という点につきよう。だがこの点については若干の注釈が必要である。

第一に、階級の統一は受動的に蒙りえぬ、と言うとき、この命題は、外的条件（労働の形態や収入、消費の型や

水準、生産過程における役割など）の類似性や同一性によって階級を定義しようとする社会学者に対抗して、階級形成における実践の契機を強調するものである。労働者は労働者であるかぎりの自己の状態を乗り越えることによってプロレタリアとなり、さらに組織活動をおしてはじめてプロレタリア階級を形成する、したがって階級はそれ自体としては存在しない、とまでサルトルは言い切るのである。

他方、階級の統一は自然発生的に生じえぬ、という第二の命題によって、プロレタリアートの〈革命的衝動〉とか〈ダイナミズム〉なるものに永遠の実体を付与することを拒んでいる。活動家の疲労度とか、過去の闘争の記憶とか、指導者の政策などとの関連の中で、「状況の具体的な可能性に応じて」これを測定すべきであるとする。革命的本能や自然発生性を無条件に打ち出すことは、歴史のあらゆる機会を人民大衆の側に置き、失敗はすべて指導者の責任に帰する、図式的な歴史解釈に通じていくであろう、と。

ここでサルトルがもっとも強調するのは、プロレタリアートの自己形成の運動における〈他者〉との抗争の側

面である。すなわち、〈自覚〉と〈組織化〉という労働者の側の実践が、ブルジョアジーの実践によっていかに条件づけられるか、この階級闘争を蒙る歴史に注目する。

ではブルジョアジーの実践とは正確には何だろう。サルトルはそれととりわけ、労働者を〈大衆化〉⁽⁷⁾する試みのうちに見てとる。そこから議論は大衆論へと移行していく。大衆とは彼によれば、相互に機械的・外面的関係しか持たない労働者の惰性的な集合であり、有機的な統一によって特徴づけられる階級とは区別されねばならない。労働者はすでに、労働し疲勞し貧窮を押しつけられて無力感に打ちひしがれているが、ブルジョアジーは彼らに、自由契約、選挙権、個人主義など、いわゆる「民主主義的諸権利」を差し出すことによって、彼らをいっそう孤立化させ、社会の一原子に還元しようとしている、というのだ。

とするなら、この惰性的・受動的な大衆自体から「階級への組織化」を期待することはできないだろう。そこから次の結論が引き出される。「行動があらゆる瞬間に可能であるためには、実践が呼びかけとして、模範として、またただ単に、為されうることの形象化のようなも

のとして、大衆自身のふところに存在することが必要である。要するに、実践をそっくりそのまま具現した一つの組織体が必要である」⁽⁸⁾

この組織体を、サルトルはこの時点では〈党〉として構想していた。大衆の中にありながら、大衆を階級へ統一する〈純粹行動〉、あるいは「労働者を権力奪取にむかって引き入れつつ結合させる運動そのもの」⁽⁹⁾、これが〈党〉である、と。したがって〈党〉がなければプロレタリアートは階級闘争を受身に蒙ったまま大衆に分散し、退化し、階級としての実践は不可能ということになる。

そればかりではない。必要性から導き出されたこの〈党〉には、絶対的な權威 (autorité) が与えられることになる。「労働者の自然発生性から生まれる甘美な産物であるどころか」、「定言命令のごとく各人に押しつけられる」組織体、「秩序 (ordre) を打ちたて、かつもろもろの命令 (ordre) を与えるような一つの〈秩序体〉⁽¹⁰⁾ (ordre)」として〈党〉は規定される。後にメルロオ＝ポンティは、サルトルのこの〈党〉概念にたいして「ウルトラ・ボルシェヴィズム」という痛罵を浴びせるが(『弁証法の冒険』)、たしかにこれらの表現からは、鉄

の規律の前衛党、「外部からの意識」を強調したレーニンの党以上に権威化された〈党〉が想像されうるのである。

以上にみられるボルシェヴィキ的テーゼへの加担は、一九五二年の事件の衝撃がいかに大きかったとはいえ、革命民主連合(RDR)当時のサルトルの発言からは思ひも及ばぬ転回であった。転回度の大きさは、とりわけ次の二点はおいてもっとも明白に確認されうる。

第一。一九五二年の労働者のストライキへの不参加を、個々の労働者の士気喪失として捉えたうえでサルトルは、この士気喪失を、個人的利益と一般的利益、日常的勝利とプロレタリアートの運命、要するに直接的目的と遠大な目的との絆が個々の労働者において見失われてしまったことから説明している。ここで思い出されるのは、『政治鼎談』の中でも「チトー主義論」(一九五〇年、『シチュアションVI』に所収)の中でも同じ趣旨の説明方法が用いられていることである。すなわち、マーシャル・プランへの反対闘争を強いられた一九四八年の炭鉱労働者についても、社会主義の建設期におけるプロレタ

リア階級のうちに、特殊の利益と普遍的利益との分離が指摘されていた。つまりこれは、革命運動の危機ないしは後退を分析する際の、サルトルの基本的視点ということが出来る。

それでは、その二つの利益の分離を産み出すのは何なのか、誰なのか。『政治鼎談』の中ではこの分離の責任は〈党〉に帰されている。たとえば〈党〉は次のような言葉で断罪されている。「具体的な自由の開花を阻止しているのは、社会主義学説でもなければ、社会主義イデオロギーでもない。社会主義行動の必然性でさえもない。それはあの半ば制度化した政治形態、つまり政党の存在なのだ」⁽¹²⁾。そこから、「党がやっている仕事とは逆の仕事」をなすべき組織としての〈連合〉の存在理由が主張されたのだ。他方、『チトー主義論』の中では、この分離を産み出すのは、生産の強化を至上命令とする建設期の社会主義それ自体である。ルイ・ダルマスの書いた『ユーゴスラヴィアの共産主義』への序文として書かれたこの文章は、一方でチトー主義をスターリン的客観主義にたいする主観性の回復として擁護しながら、他方ではスターリン主義を〈歴史的必然〉として容認する論理

を含み持つ、過渡期のサルトルを示す両義的なテキストであり、その意味で注目すべきであるが、そこでは〈党〉指導部は、プロレタリア階級の二重の利益を分離させた責任者としてではなく、「建設期の政治」によって強いられた客観主義体制の犠牲者として捉えられている。⁽¹³⁾

これにたいして一九五二年の「共産党員と平和」の中では、この分離の責任は〈党〉に帰されるどころではない。その原因がフランスの階級闘争の歴史の中へ送り返されたのはともかくとして、「大衆の凝集力を維持し、大衆の有効性を保持するのは、共産党でなくして何だと言うのか⁽¹⁴⁾」という言葉が示すように、〈党〉こそ労働者における特殊的利益と普遍的利益との統一を保証することが強調されているのである。RDRの時期の発言と比較するとき、これは百八十度の転回と言わざるを得ないだろう。

第二。大衆における自然発生性の否定もまた重要な転回点を記している。一九五〇年の「チトー主義論」では、破壊期において、という限定はあるにせよ、大衆の自然発生的な復権要求を高く評価し、次のように書いている。「大衆の自然発生的な復権要求は資本主義社会の解体を

促進する結果となる、と同時にそれは、プロレタリアの奥深い性格を表現している。(……) 大衆の意識は実践的な真理を有する、なぜならそれは一つの状況の必然的な表現だからであり、その復権要求は〈人間が人間にとって至高の存在である〉ような社会へむかっている自己の乗り越えを含んでいるからである」⁽¹⁵⁾

たしかに、社会主義の建設期においては、自然発生的な要求が経済的必要と対立してマイナスに働きのうること、さらには自然発生的な意識にも〈物象化〉が生じうることとを認めてはいるが、大衆の自然発生性それ自体を否認しているわけではないし、〈物象化〉を否定的に捉えている以上、プラスの価値は自然発生的意識にこそ与えられているのである。それは、どちらかと言えばレーニン主義に對抗して、ローザ・ルクセンブルクを繰り返し援用する姿勢のうちにも表われている。ところが「共産党員と平和」第二論文の中では、自然発生性の存在そのものをまったく認めない、ないしは、ある形での存在を認めながらもこれを価値化することをきっぱりと拒むのである。⁽¹⁶⁾

④ 背景と意味

そこであらためて考えてみたいのは、サルトルがこのような階級論、〈党〉概念をうち出してきたその背景、さらにはその意味である。一九五二年における「ウルトラ・ボルシェヴィズム」へのこの急激な転回はいかにして可能だったのか。またそれは、政治的言語の枠組をこえたところで、何を意味しているか。

「共産党員と平和」が、共産党の擁護という政治的決断に発し、その意図に貫かれていることはすでに述べたとおりである。政府の弾圧と労働者の離反によって共産党が孤立していく状況をにらみながら、党と階級との絆、党の指導性の必要を強調したわけで、そのかぎりでは、政治的意図が理論的考察を方向づけた、と言うことができる。

他方、サルトルが自然発生性を否認するとき、その主張は一九五二年における労働者の現実の意識状況の分析によって支えられていることも認めねばならない。かつて「チトー主義論」の中では、自然発生性という言葉は一つの自明な観念として操作されていた。これにたいし、

一九五二年のフランスの労働者がストライキを拒否し、デモに参加しなかった理由は何かを探りながら、サルトルは、プロレタリアートの自然発生性なるものが現実には存在しないことを確認する。逆に彼が発見するのは、惰性化しうるものとしての階級の可動性、さらに大衆という分散の相であった。〈大衆化〉をあらゆる領域で押しすすめようとするブルジョアジーの実践であった。そして、この惰性と分散が深く確認されればされるだけ、これへの対抗として、行動（能動）であり統一である〈党〉の必要性が性急に持ち出されることになる。性急に、と言う理由は、ここには論理の飛躍が指摘しうるからである。第一に、階級の惰性化―大衆化についての分析をそのまま受け容れるにしても、そこから、階級の統一を導くものは常に〈党〉でなくてはならぬ、という結論は論理的には出てこない。第二に、仮にそれが一九五二年のフランスの状況の中では〈党〉であることを認めたとしても、その〈党〉が永続的に純粋行動（能動）であることを保証するものは何一つない。階級の惰性化について語るのなら、同じく階級闘争を蒙るものとしての〈党〉の惰性化の可能性についても問うべきであった

ろう。しかもこの第二点については、チトー主義論を書いたとき、すでに彼の思考の射程に入っていたはずで——なぜならそこではソ連の官僚体制を、プロレタリア階級の物象化に対応する指導者集団の物象化として捉えているのだから——この点をあえて不問に付して「党」を原理的に純粋な活動性であるかのごとく提示したところに、「共産党員と平和」の政治性をもっともはっきりと表われている。

けれども、政治的決断、政治的意図以上に私が重視して考えたいのは、一九五二年以前から、ヘウルトラ・ボルシェヴィズムを許容しうる、ないしはそこに帰結しうるある種の人間観がサルトルのうちに形成されつつあったのではないか、そして彼の「党」についての考え方は、この人間観と切り離すことができないのではないか、という点である。

四十年代の文学作品のうちにほとんど常に二つの型の政治的人間が対置させられていることは、注意深い読者なら誰でも気がつくはずである。マチウとブリュネ（『自由への道』）、アンリとカノリス（『墓場なき死者』）、ユゴーとエドレル（『汚れた手』）、リュシアンとジャン

（『歯車』）などである。ロジェ・ステファヌの『冒険家の肖像』（一九五〇年）へ寄せた序文の中では、さらに、この二つの型の人間が典型化され、冒険家（行動的人間）と活動家（闘士）との比較論へと発展させられている。冒険家は自意識から出発した人間であるが、活動家は「党」を媒介にして自我を発見する人間である。前者は否定的自由を体现し、行動を自己目的とする孤独の人間にとどまるが（ここでわれわれは『人間の条件』のチエンを思い浮かべることができる）、後者は「党」の指導する建設作業にたいし自己を相対的な存在として把握する肯定性の人間である（同じく『人間の条件』のキョーを念頭に置いてみよう）……両者をこのように対照させながらサルトルは、革命運動が「冒険的な否定性と、規律そのものである建設性¹⁷⁾」という二つの面を備え持つべきことを説くのである。

同じテーマはやはり五〇年の「チトー主義論」にも受け継がれている。ユーゴスラヴィアの社会主義を「客観主義体制」内部における主観性の回復として意味づけ、チトー主義の存在が「われわれ西欧の共産党の活動家たちの意識内部に働きかけて、彼らの主観性を再発見させ

るに違いない⁽¹⁸⁾」と書くとき、その期待は、「冒険的な否定性」の回復にたいしてこめられているわけだ。さらにつけ加えるなら、五年の『悪魔と神』におけるゲッツとナスティの関係も、そのまま、冒険家と活動家とのありうべく関係を具現させたものであったし、『聖ジュネ』の最終章におけるジュネがブハーリンかの問題提起も、両者を近づける〈孤独〉の体験に力点が置かれてはいるにしても、冒険家と活動家を対立させ、交錯させる発想にもとづいていることは明らかである⁽¹⁹⁾。このようにみえてくると、五〇年と五一年は、サルトルが政治的に沈黙と非行動を押しとおした時期であったが、主題のこの集中にみられるとおり、政治的人間についての思考の原型は、むしろこの時期に練りあげられ、定着されたとさえ言えるであろう。

ただここで、次のことを忘れてはなるまい。両者を比較、検討するなかで、サルトル自身は常に冒険家の側に身を寄せて考えてきたこと、と同時に、活動家の側に道理を与え続けてきたことを、『冒険家の肖像』序文の中に次のような一節がある。「私は冒険家にこそ真の敗北を、言いかえれば活動家の勝利を心から願うものだ。活

動家が勝利を収めることこそ道徳的である。(その上、歴史過程に合致している)。彼はいかなる点においても正しい(道理を持つ)(……)しかしながら、活動家の勝利に拍手を送った後に、私がつき従うのは冒険家の孤独の道である⁽²⁰⁾」当然のことながら、意識から出発したサルトルにとって、問題は、「冒険家―行動的人間をいかにこえるか」という形でしか立てられなかったのである。実際、『汚れた手』はエドレルのドラマではなくユゴーのドラマであり、『悪魔と神』はナスティのドラマではなくゲッツのドラマである。『聖ジュネ』の最終章においても、サルトル自身にとって選択は一つしかなかった。ブハーリンの道は、彼が社会主義社会の人間だからというよりも活動家であるがゆえに、サルトルには選べないのである。

逆に言えば、サルトルの世界に提出される活動家は、冒険家の対概念として、抽象的に構成されているのだ。後者の冒険性、エゴイズム、否定的自由への反省が強まれば強まるだけ、前者には規律性、献身、具体的自由が付与される。ときとして活動家は、冒険家が逆投影された虚像にすぎないのではないか、とさえ思えてくる。文

学作品においてはそれがはっきりと出ている。冒険家型の人物がきわめて陰影に富んだ現実性を備えているのにたいし、活動家型の人物はしばしば単純化され(『汚れた手』のジョルジュやスリック)、複雑ではあっても理念化されている(同じく『汚れた手』のニドレルや『歯車』のジャン)。

この単純化、理念化がもっとも極端な形で現われるのは、活動家と〈党〉との関係が考察されるときであろう。冒険家にとって〈党〉とは〈自我〉の対立物である。彼が入党をするなら、それは〈自我〉の孤独を癒やすためだ。他方、活動家にとって〈自我〉は〈党〉によってこそ与えられた。「彼自身の内部で〈党〉は彼自身に、また他の同志すべてに変身する。〈党〉の創造物である彼は、どこへ行こうと〈党〉を見出すであろう。彼と、彼のもっとも親しい友人たちのあいだで、〈党〉は必要欠くべからざる媒介となるであろう」⁽²²⁾ここでは、冒険家と〈党〉との関係がそっくり裏返され、活動家は〈党〉と一体と化した存在として考えられている。絶対目的とみなされる社会主義の実現と、「これに達することを可能にするさまざまな行動の一致した集合体」としての〈党〉

が、活動家をこの目的のための手段として定義するのである。

このように見てくると、サルトルにおけるヘウルトラ・ボルシェヴィズムへの加担も、一九五二年の事件をきっかけとした百八十度の転回、とのみは言い切れないものがある。実際、「共産党員と平和」の中では、党内における批判の自由を否定するところまで議論を押しすすめているが、その議論の根拠も、いま述べてきた活動家論の延長上にあるのである。⁽²³⁾

⑤ 問題点

サルトルにおける組織論の原型と、その政治的背景ならびに思想的な意味を以上のように把握した上で、あらためて第二論文にはらまれる問題点を拾い出してみよう。第一に、大衆の自発発生性を抽象的理念として斥けながら、他方で〈党〉を〈純粹行動(能動)〉として理念的に規定するとき、そこには二つの論理の使いわけがある。もしも、階級闘争を蒙るものとしてのプロレタリアートの情性化―大衆への分解について語るのなら、同じ条件下に〈党〉の情性化についても問うべきであったら

う。プロレタリアートの内的解体を歴史的に証明しようとするのなら、それに対応した形で「党」ないしは組合指導部についての検討が必要であつたろう。

第二に、階級を自己生成として、実践（自覚と組織化）の契機を強調しながらも、そのとき、階級の客観的な諸条件との関連で実践が問われていなかった。もしも階級の客観的な諸条件が均一でないならば、各労働者の自覚の構造も、つまりは階級意識の形成も均一ではありえなくなり、実践の方向も分岐してくるに違いない。他方、組織化の水準において実践を考えた場合にも、大衆の置かれているそのときどきの客観的諸条件によって組織化という実践の内容は限定を受けるであろう。場合によっては組織化の主体である「党」にその条件がはね返って来うであろう。そのところをサルトルは見逃している、ないしはあえて無視しているように思われる。

しかしながら、第二論文は、このように、またその他にも問題点を多く含みながらも、サルトル思想の発展という視角から見ると、重要な展開の契機をのぞかせていることもたしかである。そのもっとも重要な契機を一

つあげれば、集団的存在の受動性—情性の相の発見であろう。発見という語が適切でないなら——なぜなら、「チトー主義論」の中では「物象化」(Verdinglichung)という概念で労働者大衆の「情性化」に相当する現象がすでに語られているので——強調と言ってもよいし、主題化と言ってもよい。いずれにしても、以後、この情性という概念は、情性を生じさせる力としての「他者」の実践についての思考と一体をなして、サルトルの政治思想の中心に組み込まれていくことを指摘しておこう。

(1) 「共産党員と平和」については、私はこれまでに一度「マルクス主義とサルトル」の題名で論ずる機会があったが(『否認の言語』のノート)内に所収——品文社、一九七〇年刊)いろいろな点で不満が残っている。そこで今回稿をあらためてここではまず組織論の視角から考え直してみたい。なお、サルトルの論文原題 *Les communistes et la paix* はこれまで「共産主義者と平和」と一般に訳されており、私もこれにしたがってきたが、これを機会に、より正確な訳題として「共産党員と平和」にあらためる。もっとも、日本語の語感から言うなら *les communistes* は多くの場合、「共産党」と訳した方が妥当であろう。

(2) 一挙に、というのはあくまでも政治的言説の場においてのことであり、サルトル自身の内部においては、東西の

冷戦が頂点に達していくこの時期に、ソ連―共産党の選択が徐々になされていったと私は考えている。この点で注目したいのは、一九五〇年十二月にアメリカのザ・ネーション紙八十五周年記念号に寄せた手紙で、この中でサルトルは、朝鮮戦争はソ連の陰謀であるという説をやりわりと斥け、「中国の参戦についても、中国が朝鮮を重要視しているのは当然のことだ」として、戦争の責任を暗にアメリカの「感情的・抽象的」反共政策に負わせている。また、「北京政府を承認することが、あなたがたをアジアにとどめる唯一の道であったことを自覚すべきであったと思う」という発言、あるいは、ヨーロッパの共産党は「たいていはプロレタリアそのものである」という発言のうちに、東の陣営、共産党を選びつつある現実主義的姿勢をうかがうことができる。

(c) Merleau-Ponty, 1961, in: *Situations*, IV, p. 249.

なお、このときの衝撃について、またそこから「共産党員と平和」を書いたことの意味についてのサルトル自身の証言は、時代とともに変わってきている。「メルロオリボンティ」の他の箇所では、「回心」という言葉さえ使われているのだから、一九七五年に発表されたあるインタビューの中では「一九五二年はそんなに重要ではなかった(……)」。客観的には一九五二年は重要な曲がり角となっているかもしれないが、主観的にはそんなじゃないんだな」(「七〇歳の自画像」、『シチュアションX』に所収)というふうな、

一九五二年の変化を小さく見積ろうとしている。一九七五年一月、私がサルトルに会い、彼の政治思想の変遷についてインタヴューをしたときにも、同じような印象がえられた(筑摩世界文学大系『サルトル』の月報参照)。一九六八年五月の重要性を強調する今日のサルトルにとって、一九五二年のモメントはあまり重視してほしくないであろう。もっともこの点については、次のような発言もあわせて念頭においておく必要があるだろう。「今日わたしが共産党を、当時彼ら(トロツキスト)がやったように批判しているからといって、彼らの理由が正しかったことにはかならずしもならない。真理は『生成』したのであって、大分なのは真理に通ずる道、またそこに達するために、自分たいては他人とともになす作業だ。」(「七〇歳の自画像」)

(4) もう一つこれに、エチアンブルからの公開状がこれに加わる。エチアンブルは一九四五年以来レ・タン・モデルヌ誌に協力してきたが、「共産党員と平和」以後のサルトルの共産党への接近に批判的で、一九五三年七月、公開状を発表して袂を分かった(Lettre ouverte à Jean-Paul Sartre; Arts, 24 juillet, 1953.)

(5) プロレタリア階級の内的解体を論じたこの箇所は、一九五〇年に発表された「冒険家の肖像」(『シチュアションVI』所収)における活動家の分析と重なりあっていることに注目しておきたい。

- (6) Situations, VI, p. 196.
 - (7) 原語の massification は masse からできた新語である。dictionnaire des mots nouveaux (Tchou, 1971) 参照。『シチュアシオンVI』の日本語訳は、いずれも「愚鈍化」となっており原意をほとんど伝えていない。
 - (8) Situations, VI, p. 247.
 - (9) Ibid. p. 249.
 - (10) Ibid. p. 247.
 - (11) 革命民主連合におけるサルトルの活動については拙稿「革命民主連合とサルトル」(『人文科学研究』一九七七年)を参照いただければ幸である。
 - (12) Entretiens sur la politique, p. 180.
 - (13) 「指導者たちと、その命令を実行する官庁は、ブルジョアが資本の犠牲であること、客観性の犠牲者なのだ」(Situations, VI, p. 37.)
 - (14) Ibid. p. 195.
 - (15) Ibid. p. 29.
- なお、「チトー主義論」以前には、革命民主連合の時期を含めて、サルトルは自然発生性という言葉を用いていない。ただ一度だけ、一九四五年「パリ解放について書いた短い文章」(「パリ解放」(「黙示録」の一週間) (La libération de Paris: Une semaine d'apocalypse, in: Les Ecrits de Sartre) の中で、マルロオの『希望』から「黙示録」という語を借用しながら、「パリの民衆の一斉蜂起を、〈黙

- 示録〉すなわち革命勢力の自然発生的組織化の勝利、として意味づけ、「自由の爆発、既成秩序の壊滅、自然発生的かつ有効な秩序の創造」をたたえているのが注目される。同じような言葉の用法はこの「チトー主義論」の中で、「反乱の弁証法的で黙示録的な運動」という言いまわしのうちに再度見出されることになる。この二つの例は、自然発生性という言葉がサルトルの政治思想の中で、どのようなイメージをもって使われているかを指し示している。周知のとおり、「黙示録」という言葉はその後、「融合集団」を示す語として『弁証法的理性批判』の中に持ち込まれていく。
- (16) ある箇所では、エンゲルスを引用しながら、「この視角に立つと『無意識で無意志的な力』なるものは便宜的な虚構であり、自然発生性にかんして言えば、そんなものは存在せぬことになる」として全面的な否定に身を寄せ、他の箇所では「(……) 大衆のいわゆる『本能』が状況の結果であるとしても、その本能の激しさは、これに従わねばならぬことを証明するものではない」とやや譲歩を示している。(Situations, VI, p. 230. et p. 233.)
 - (17) Situations, VI, p. 22.
 - (18) Ibid. p. 67.
 - (19) プーハリンはもちろん活動家のカテゴリーに属するが、失敗した革命家であるかぎりにおいて彼は、冒険家の特性である主観性、孤独を分け持つことになる。

(83) 「共産党員と平和」第二部をめぐって

- (20) Situations, VI, p. 20.
(21) Ibid. p. p. 8—9.
(22) 「批判の自由は、細胞の指導者や組合の委員の眉をひそめさせるだけではない。だれもが他人における批判の自由を恐れているのだ、批判の自由は以前の孤独、不一致を思い起こさせるのだ。(……) 与件を乗り越える——言

かえれば行動する——力ということにすぎない彼の自由は、組織というこの一定の現実のさなかで表明される。労働者は〈党〉から検討を求められた問題にそくして、〈党〉から与えられた原則にもとづいて、自分の思想を形成するのだ」(Situations, VI, p. 250.)

(一橋大学助教授)